

麻田藩主の方廣寺参廟と巡見

2007年11月3日 講師：三田市総務課市史編さん担当 印藤 昭一

1 江戸時代の方廣寺（市史第4巻近世資料674頁史料343）

麻田藩は豊嶋郡麻田村（現在の豊中市）に本陣を構える1万石の大名で、藩主は青木氏。2代藩主重兼の時、寛永4年（1627）に高平地区に領地を持つ。

343は末吉村にある方廣寺の天明7年（1787）の出納帳である。この帳簿は麻田藩の役人に差出され、確認を受けた後に寺に戻されていることから、方廣寺が藩の監督下にあったことがわかる。これは同寺が青木重兼の菩提寺として藩から30石の「作相米」を支給されていたためである。実際にはこの支給は銀でおこなわれており、支出項目の内容からも、当時（米ではなく）銀使いの経済であった様子がうかがえる。

帳簿には藩からの作相米支給に関する文書が引用されており、米の換銀に関する貴重な情報を提供してくれる。作相米の内22石を占める高平産の米は、陣屋周辺の村で生産された「豊嶋」産米より高値で換銀されたことがわかる。また、物品の購入先が主として池田や三田であったことも確認できる。

2 明治2年の藩主の参廟・巡見経路（231頁史料87、704～707頁史料361・362）

歴史資料が残されるのは、一般に何らかの（特に権利・義務に関わる）必要があったからである。逆説すれば必要のない文書（＝情報）は作成されず、また後世に残されない可能性が高いことを念頭におく必要がある。

361は高平地区の大庄屋や明治期の地方の公職を歴任した家に伝わる日記から抜粋。歴代の麻田藩主は、方廣寺にある重兼の墓への参廟をたびたび行っていた。明治2年（1869）は、2月14日に巡見名目で藩主が来訪する知らせがあり、10日には下見の代官が波豆川村から高平地区を一周し、12日に波豆村（宝塚市）に泊った。これは翌日に藩主が波豆村に到着する予定であったことを見こした上での行動と推測される。

日記には休憩所や宿泊所での菓子や食事の内容が詳細に記される。これは藩主の接待が大庄屋の主要な役目として認識されていたことを示している。禁酒中にもかかわらず藩主に酒を提供したという記述は興味深い。これも後日の接待に備えての記録であろう。なお362の木器村の庄屋が記した記録には、藩主の饗応に関する細かい記録はなく、役目や関心の所在の違いがうかがえる。

2月14日の方廣寺への墓参は恒例行事であったが、実は青木重兼の命日は9月14日である。この日は新暦では10月中旬で農繁期にあたる。そのため「撫民」の観点から半年ずらして参廟をおこなっていたことも推測できる。

3 明治2年の巡見をめぐる2点の記録

361と362の記録内容を比較することで巡見の際の大庄屋と庄屋の役割の違いが分かってくる。両者の記載内容の違いは、その作成者が藩主の巡見においてになった役割の違いによるものである。

4 「記録」のなされ方

「記録」や「文書」は一般に必要なに応じて作成され、必要な事項のみが記述され、必要に応じて保存されるものである。361と362の記載内容の比較を通じて、歴史史料一般の取り扱い通ずる留意点を実感していただければ幸いです。